

素 顔 拝 見

医歯学系・助教（口腔生化学分野）

相 田 美 和

初めまして。平成19年4月1日から口腔生化学分野の助教としてお世話になっております。相田と書いて‘そくだ’と読みます。「そくだ！ そくだだったのかあ」と、子供の頃はクラス替えの度に新しい担任の先生が必ず口にする、小学生にもウケない冗談の後のシンと静まり返る瞬間がとても辛くて、自己紹介が大の苦手でした。今でも苦手ですが、初めましてのご挨拶が必要な方が大勢いらっしゃる身ゆえ、この場をお借りして少し自己紹介させていただきます。

私は福岡県北九州市の出身で、学生時代からこれまでずっと福岡県内で過ごしてきました。新潟が本州初上陸の地です。九州から見た新潟は、天気予報の画面に映る雪のイメージが強く、こんもりと積もった雪を連想しておりました。ところがこの原稿を書いている12月末現在積雪も無く、寒がりの私は少しほっとしています。以前はもっと降っていたということですから、地球温暖化の影響でしょうか、それはそれで心配ですね。福岡は中途半端に暖かいため、換気と称して廊下の窓やドアが全開になっていて建物の中でも寒いことがあったので、かえって今の方が暖かく快適に過ごしています。新潟は山々に囲まれた広い平野と日本海、とても自然環境に恵まれたところだという印象を持ちました。せっかく当地へ来たのですから、山に登ったり（ファミリー登山程度ですが）、佐渡の海に潜ったりしてみたいともくろんでいます。

仕事の方は、これまで細胞内膜輸送についてゴルジ体を中心にした研究をしてきました。慢性関節リウマチやシェーグレン症候群などの自己免疫疾患患者の自己抗体の中にゴルジ体と反応するものがあり、その抗原をクローニングしたのがきっかけです。それら抗原蛋白質はゴルジ体の形態維

持や小胞輸送に働いていることがわかってきました。歯科の臨床では馴染みが薄い内容ですが、歯学科の2年生で使う分厚い教科書、細胞の分子生物学13章で取り扱っているような基礎研究（の一端）です。直ぐに役に立つ、臨床に直結、というわけにはいきませんが、様々な生命現象の理解や臨床応用に繋がる研究の土台になればと思って続けてきました。

私は卒業が薬学部、前任地が医学部、そしてこの度縁あって織田公光教授のもと歯学部、と図らずも生命科学の学部を渡り歩いてしまいました。基本は同じ生化学でも、それぞれ学部によって考え方や興味の方向が大きく違って面白いです。歯学領域の生化学分野での現在の研究対象やこれからのニーズがどこにあるのか、今アンテナを張って模索しているところです。これまでの経験を活かして貢献できることを願っております。まだまだと言いますか、いつまでたっても修業中、学生時代よりも勉強しているのだから不思議なものです。普段は7階のペントハウス(?)に籠って地味に実験しています。千里の道も一歩から。地道な作業の合間に眺める教室からの景色は素晴らしく、遠くの山々が白い帽子をつけるのを半分楽しみに、半分恐々待っています。皆様どうぞよろしくお願い致します。

*



医歯学総合病院・助教
(摂食・嚥下機能回復部)

梶 井 友 佳

こんにちは。平成19年2月より摂食・嚥下機能回復部の助教になりました、梶井友佳です。平成11年に日本大学の歯学部を卒業し新潟へやってき

ました。この世に生を受けてから大学を卒業するまで東京の親元でぬくぬくと育ってきた私でしたが、新潟に来て9年が経とうとしています。新潟大学の大学院へ進学、小児歯科を専攻し、研究は口腔生理学講座で嘔下や味覚に関する基礎研究を行いました。大学院時代の研究内容が嘔下だったこともあり、このたび摂食・嘔下リハビリテーション学分野に移動となりました。小児から高齢者まで幅広く知識と技術を身につけるチャンス！と思いついたのですが、全く違う分野での一からのスタートは想像以上に大変です……でも、学生時代にスキー部で身につけた体力と根性で日々外来と病棟を走り回っています。

今回「素顔拝見」を仰せつかっていったい何を書こうか……とかなり悩み、いくつか原稿も書いてみたのですがまとまらず、結局私の原点である両親について書こうと決めました。実は、この原稿を書いている時点ですでに編集委員の先生から「原稿ください」のメールが届いていました……遅くなって申し訳ありませんでした。

私の両親は、歯科医でした。東京医科歯科大学を卒業し大学院へ進学、父は補綴学、母は小児歯科学を専攻し、その後開業しました。同じビルの同じフロアで同じ日に別々に開業し、その年に生まれたばかりの私はすぐに保育園へ預けられました。保育園のおかげでやんちゃで活発な幼少期を過ごしました。小学生の頃は、両親が共働きであったため、春休み・夏休み・冬休みには3つ上の兄とともに泊まりがけの〇〇教室（スキー教室とかサマースクールとか）に行かされました。当時は家族や友達と遊びに行けないことを不満に思っていました。今思えばかなり贅沢な子ども時代でした。そして、自分にも子どもにも厳しく、休まずよく働く両親でした。

開業して33年目に体調不良もあり母が歯科医院を閉院しました。母と同じ小児歯科を専攻した時から、母の歯科医院を継ぐことは頭の片隅にはありましたが、母はそれをよしとしませんでした。

「この医院はもう古い。開業するなら、あなたの医院を新しく自分で作りなさい。私もそうしてきたのだから。」そう言って、私の未来への可能性を優先してくれたんだと思います。閉院前の1年間、

私は毎週末東京へ帰り、母の診療を学び閉院を手伝い、その精神を継いだつもりでいます。

それから1年後、私の小児歯科から摂食・嘔下への移動が決まった年、父が急死しました。あまりに急だったので、父の最期に私は立ち会えませんでした。前日まで現役の医院長として仕事をしていたので、父の死を悲しむ間もなく次の日から予約の入っていた患者様の対応に追われました。結局、父の死から1ヶ月後に父の歯科医院は閉院することになりました。患者様の紹介や閉院の手続きをする中で父の患者様に対する思いに初めて触れ、もっと父から学んでおくべきだったという気持ちでいっぱいでした。残されたカルテや模型を覗いては、聞きたいことがどんどん出てきて死に急いだ父を恨みました。

あれから1年、父の喪も空けて年末年始に母と二人で旅行しました。仕事について、父について、思う存分語る余裕がようやく出てきた母との旅は最高でした。先に逝ってしまった父への恨みから始まり、そのうち楽しい思い出話に花が咲き、そしてこれから先のことへと話は進みました。最後に母は「人はこうやって悲しみを乗り越えてゆくんだね」とつぶやきました。かなり贅沢な旅だったので懐が痛みましたが、これからも母との二人旅は時々続けたいなと思っています。

＊

医歯学総合病院・助教
（義歯（冠・ブリッジ）診療室）

田口裕哉

こんにちは。平成19年2月1日付で助教となつてしまった義歯（冠・ブリッジ）診療室の田口で



す。平成12年に本学を卒業し、昔の歯科補綴学第二分野（現：加齢歯科補綴学分野）に大学院生として入局させて頂き、あれやこれやとしているうちに現在に至り、あつという間に卒後8日目となってしまいました。この間、多くの先輩先生方、後輩、同期の仲間達に支えられここまでこれたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。最近では大学に残っていた同期がひとり、またひとりと大学を退職していき、残りはわずかとなりさみしい限りです。現在大学では補綴治療を主とした一般歯科治療のほか、兼任部員としてお手伝いさせて頂いているインプラント治療を中心に日々の診療を行っています。

出身は生まれも育ちも新潟県の小千谷市です。そう、あの地震のあった小千谷市です。高校生までは小千谷で過ごし、大学入学とともに新潟市に来たので新潟県を離れて過ごした経験がありません。今のところ新潟から県外へ脱出する予定はないので、このまま一生新潟県人として生きていくことになるのでしょうか……？

私が助教（昔の助手）になった経緯ですが、まさに降って湧いてきたような話で……。昨年のちょうど今頃（原稿を書いている今は平成19年12月20日です）はうちの医局の出張先に長期出張中で、上越市中郷区（新井市と妙高市の間くらいの場所です）の歯科診療所の院長として勤務しており、出張期間は平成18年10月から平成19年3月までの半年間の予定でした。院長として勤務し、やっと慣れてきたかなあと思っていた12月のある日の診療終了後、車に乗って街に出かけていたところ突然携帯電話が鳴りました。着信を見ると「Prof. 野村」となっており滅多にかかってこない教授からの電話だったので、何かと不審に思いつつも車を止めて電話に出ました。私「(恐る恐る)もしもし……」Prof. 「(ちょっと高めの声で)あ～、もしもし野村だけど、2月に助手として採用されることが決まったから、1月いっぱいまでこっち戻ってきてよ」私「えっ、2月と3月の院長はどうするんですか？」Prof. 「中舘君（私の後に4月から院長として出張予定となっていました）に2ヶ月前倒しでそっちに行ってもらおうから」私「はあ～、ただ急な話なので前向きに検討させ

て頂くということで少し考えさせてもらってもいいですか？」Prof. 「うん、じゃあそれでいいね。はい、よろしく～」というようなやり取りを経て、助手となってしまいました。診療所の患者様の引き継ぎなどもあったため2月を数日過ぎた頃に大学へ復帰しましたが、復帰翌々日にいきなり総診ライターをやることになっていて、要領がよくわからずオロオロしながら何とかその日乗り切ったことを今でも覚えています。6年生迷惑かけてごめんなさい。

素顔拝見ということなので、自分のことを分析してみると、喜怒哀楽の激しい八方美人だと思います（怒と哀はあまりないですが）。大学内では几帳面なタイプと思われるかもしれませんが（そんなこと思われていない!?）実際はかなりのめんどくさがりですぼらな性格だと自分では思います。また、飽きっぽい性格なのであまり物事が長続きしない方ですが、歯科のことについてはいまだに飽きもせずやれています！ それと飲酒が大好きなのですが、今の医局にはこんな私と一緒に楽しく飲酒をしてくれる同僚がたくさんいるので、大変幸せです。

助教といってもまだまだ若手のつもりでしたが、気がつけば医局内では上から数えた方が早くなってきてしまいました。技術、知識、経験など全ての面でまだまだ未熟ですが、皆様のお力をお借りしてさらなる研鑽に努めたいと思っておりますので、これからも宜しくお願いします。

✧



医歯学総合病院・助教
（歯周病診療室）

山本幸司

平成18年4月より歯周科の助教としてお世話になっております。この原稿依頼が来て思うことは、学生生活を含め新潟に来て15年になり、すいぶん長いこと留まっているなど、感じています。千葉県出身なのですが、初めて新潟の地に足を踏み

入れたのは大学受験の時では無く、高校2年の夏休みでした。時間はたっぷりあるけどお金は無いので、JRの青春18切符を手にして夜行列車の車内で寝泊りをしながら主に東日本を中心に旅行をしていました。今で言えば「鉄ちゃん」なのですが、時刻表を片手にどこまで遠くへ、しかもどれだけ安く、旅行ができるかなんて、そんな旅行を休みのときにしていたのです。今でも夏真っ盛りに青海川付近を、誰も乗っていない電車で、窓を全開にして外を眺めながら見た日本海の青さに感動したことを覚えています。越後線で新潟に着く直前、車内から見るだけではなく、日本海を見たいと思い、新潟駅手前、JR白山駅で降車し、当時まだ路面電車が現役で、線路が敷設されて電車通りと呼ばれていたJR白山駅前の通りから日本海を目指して護国神社、寄居浜あたりまで行き、そして新潟駅まで真夏の炎天下を歩きました。ガイドブックの簡易な地図しか持たずに歩いていたら迷ってしまい、大学病院裏手の駐車場の大きな壁面を前に、自分がどこにいるのか分からなくなって途方にくれ立ち止まった記憶があります。それから数年を経て再び、そして新潟で生活をするとは思いませんでしたが、いくつかの部活やバイトを中心に勉強はそこそことした学生生活を満喫し、卒後は、旧第二保存科、現在の歯周診断再建学分野に、大学院生としてお世話になりそのまま今も総合診療部准教授の小林先生のご指導の下で「免疫グロブリンレセプター遺伝子多型と歯周炎感受性についての研究」を行っています。あまり研究熱心ではないので、夜遅くまで大学に詰めていることは無く、暗くなると帰りたい衝動にかられるため、迷惑かけている関係者も多いかと思えます。

プライベートのことを少しお話します。このところ「小椋・潮田（オグ・シオ）」に注目の集まっているバドミントンですが、僕自身、大学入学したときにラケットの握り方から覚え始めて、6年間を通じてデンタルに参加し、卒後はバドミントンをできる環境を求めて、時折、歯学部部活に顔を出しつつ、学外のバドミントンサークルにも籍を置いて現在も続けています。もっとも長く続いている趣味かと思えます。昨年からは、顔を出

しているサークルが、新潟県の社会人リーグに加入しまして、そこの最底辺で遊んでいます。もともと体を動かすことが好きなので、ストレスの発散も兼ねてバドミントンを続けているのですが、ここ数年、ゲームでは、ミス続きで敗退するを繰り返し、少ない練習時間で無理をして体を痛めるなど、余計にストレスが溜まることが多く、楽しむためにはもっと自分を鍛えてからではないといけないなと考えています。社会人のサークルは、いろいろな年代、仕事を持つ人たちの集まりなので、歯科関係以外で多くの人たちと交流が持てる機会があり、外から自分の仕事を見つめ直す良い刺激となります。

昨年末に、書店で手にした本が、大学組織を一人のジャーナリストが長年の取材を通じて思った感想などを書いた新書です。私は、学生時代から新潟大学に所属し、そのままずっとこの環境で過ごして、大学とはどんなものであるのか？ 自らの経験でしか知り得なかったのですが、その本では、外から見た大学の異質性を新書らしく面白く書き綴られています。タイトルがすこし過激であるためあえてこの場は伏せさせていただきます。今後、歯科医師として、また、大学関係者としてここしばらくは、皆様のお世話になりながら、社会の一員としてのバランスを持って歩んでいきたいと考えています。よろしくお願ひします。

✧



医歯学総合病院・助教
(歯周病診療室)

両角俊哉

こんにちは、平成18年4月より助教として勤務しております両角（もろずみ）です。旧歯科保存学第二講座に入局してからまる10年が経ちました。臨床も研究も真っ白からスタートした大学院生時代、両者のスキルアップに明け暮れた研究生・医員時代、全てが新鮮だった留学時代。そして、学生の皆さんと接することが自分への良き刺

激となっている現在と、全く飽きることなく駆け抜けた10年でした。とはいえ、これから学び始めたいこともまだまだ目白押しであり、気持ちだけは依然若手のつもりです。

若手といえば、学生期間が長かったせいか現在もあいかわらずカジュアルな格好で通勤しています。しかも、”University of ○○”とプリントされたいわゆる大学グッズのTシャツやパーカーがお気に入りです。実は、自宅のタンスには色とりどり多種多様な「世界の著名大学シリーズ」と自分で銘打ったTシャツやパーカー、トレーナー類が所狭しとたたまれています。中世の格式ばった紋章が印象的なスコットランド・グラスゴー大学のトレーナー、鮮やかな色づかいが森や湖の自然美を連想させるスウェーデン・イエデポリ大学のTシャツ、黒地に対する橙色文字がシンプルかつ知的なロチェスター工科大学のTシャツ、学生にまぎれて無料で入手した名門コロンビア大学の学祭用特別Tシャツ等々、30~40大学のTシャツがあります。対象は医療系の著名大学で、Dental Medicineとかであればベターですが、誰も聞いたことがないような大学のシャツもやや含まれています。

きっかけは、入局したての頃に講座の某先生が着ていた、DNA鎖の二重らせん構造や塩基配列がプリントされたNIH（国立衛生研究所）のトレーナーがいかにも科学者っぽくて格好よかったからです（なんて単純な！）。それ以来、国際学会へ行く講座の先生方には図々しくもお土産として大学Tシャツをリクエストしてきました。とはいえ、できるだけ自らの足で訪ねて購入するのが理想ですから、新婚旅行でイタリアへ行った際には、ローマ大学からベネツィア大学に至るまでそれぞれイタリア縦断Tシャツツアーであり、妻がアカデミア美術館でミケランジェロのダビデ像を鑑賞している間、私はフィレンツェ大学のブックストアにおりました。

こと大学グッズに関していえば、アメリカこそがその聖地といえます。ニューヨーク州立大学バッファロー校への留学中、休日にはオーケストラを聴きがてら近辺の大学、ピッツバーグ大学、ニューヨーク大学、トロント大学などを訪ね歩き

ました。中でも、ピッツバーグのカーネギーメロン大学は若い頃に愛読した「ゲーム少年の夢」（富田勝著）の舞台でもあり、その地に立った時には感慨深いものがありました。同時期、姉一家が東海岸のボルチモアに転勤して来ました。可愛い甥・姪に会いに行ったついでに、あくまでもついでに世界最初の歯科医学教育機関であるボルチモア歯科医学校に由来するメリーランド大学カレッジパーク校歯学部を訪ねました。またある時、姉が検査のためにアメリカ医療最高峰の地位を築いているジョンズ・ホプキンス大学病院にかかりました。姉は早速Tシャツを送ってくれました。正直な感想を伝えたら、後日別のTシャツも送ってくれました。今では家族旅行の折には弟のために大学巡りをしてくれるそうです。ラボの同僚達にも私のコレクションは浸透し、さらに増加していききました。持つべきものは姉兄であり友人であると痛感します。

数多き中にも特別なものというのがあります。大学院3年目の国際学会の帰り、研究打ち合わせのため小林哲夫先生に随伴してオランダ・ユトレヒト大学医学部の免疫学講座へ立ち寄りしました。そこは小林先生がかつて留学していたラボです。到着した夜は小林先生のラボ仲間であったLudoやWinkel教授と共に夕食をとり、その後は運河沿いのカフェテラスでホワイトビールを飲みました。小林先生が隣のテーブルで旧友と語らっている間、Winkel先生は私の拙く、ぎこちない英会話につきあって下さり、それこそ料理の話から研究の話まで様々なお話をしてくださいました。



写真1：コレクションの一部

翌日、ラボの案内してくれた後に Ludo が奥の棚から何かを持って来て、「君のコレクションにこれを加えてあげよう」と言ってプレゼントしてくれました。それはラボで特注作製したブルゾンで、背中には“for the joy of immunology”という文が縫いつけられていました。さすがにこれは恐れ多く、未だに日常着ることはありませんが、定期的な日干しの折りに手にするたび、「研究というのは非常にスリリングでエキサイトさせてくれる」、「難しければ難しいほどトライのし甲斐がある」という Winkel 先生の言葉が蘇ってきます。その頃はまだまだ研究の世界をほんの覗いただけでしたからさほど実感が湧きませんでした。今なら何となく理解できます（レベルは足下にも及びませんが）。私にとっては初めての海外旅行、初めての国際学会で、当然初めて外国のラボ見学でした。そこが非常にレベルの高いアクティブなラボであったことは、私の将来へのモチベーションにとって幸運であったとつくづく思います。

コレクションにおける究極は何か？ それはやはり、自分たちのものを作ることに行き着くのではないのでしょうか。いつかは自前の T シャツ（ブルゾンの方がカッコいいかな？）を作りたいと密かに考えています。もちろん、単に作るだけならさほど難しいことはありません。難しいのはそこに価値をもたせられるかどうかということです。いつの日かどこかの国の若い研究者が我々の



写真 2：例のブルゾン

ラボを見学に来たがるような、帰り際にラボの T シャツをプレゼントして喜んでくれるような、そんなラボになれるように一妙な動機ではあるけれどもーラボの一員としてこれからも頑張っていきたいと思います。そして、言うまでもなくその T シャツの背中文字は“for the joy of periodontology”になるわけです（誰も着てくれなそうだけど）。

＊



医歯学系・助教
(歯科矯正学分野)

渡 邊 直 子

歯学部ニュースをお読みの皆様こんにちは、歯科矯正学分野の渡邊直子です。ある年代以前の方には旧姓の大橋の方が分かりやすいかもしれません。

生まれは東京ですが、1歳になる頃には岩手の盛岡に移り住み、小学校入学と同時に新潟に引っ越してきました。以来、今まで小、中、高、大学とずーっと新潟です。ほぼ生粋の新潟人といえると思います。小、中、高までは水泳部に所属し、毎夏真っ黒になって泳ぎ、大学ではスキー部に所属し、やっぱり真っ黒になっていました。あまり運動が得意な訳でもありませんでしたが、大学に入ってから始めた競技スキーにはまり、全学のスキー部にも混ぜてもらってインカレに参加した事、デンタルで優勝できた事は良い思い出です。歯学部卒業は23期で、卒業すぐに矯正学教室に入局し、もう15年にもなります。研究については、大学院時代は当時の第一口腔解剖学講座にお世話になり、ラットの顎関節、下顎頭に加齢変化を組織学的に検索していました。その後約2年半の間、アメリカのインディアナ大学に留学させて頂きました。そこで学んだバイオメカニックスの手法も応用して、現在は顎関節の構造と咀嚼という負荷に対する応力との関係についての研究を続けています。大学院時代に比べ、より臨床的な研究に移

行しつつありますが、大学院時代に顎関節という研究テーマの軸を得る事が出来た事が、今まで、そしてこれからも大学で仕事を続けて行こうと決めたきっかけとなっています。大学院、留学の期間は基礎研究と臨床との接点が無いように感じられ、悩んだ時期もありましたが、臨床上の興味、疑問を基礎研究で得た知識、考え方で研究して行ける事が分かってから（解明できるかは別問題ですが）少し楽になりました。今はやりたい事はたくさんあるのに、要領が良くないためか、時間が足りないのが悩みです。

さて、ここまで書いた事は公式の素顔？ですが、実は最近の最大の関心事といえば、もうすぐ2歳になる娘の事です。今は構内のあゆみ保育園に通っているため、朝晩一緒に童謡を歌いながら学校町のあたりを歩く姿を見かける方もいるかと思えます。妊娠性高血圧症（昔の妊娠中毒症です）が悪化し、帝王切開で予定より早く出産したため、未熟児として保育器に入っていたのに、いつのまにか一緒に歌ったり、会話として話が出来るまでに成長しています。その成長発育の早さは、日々脳内でシナプスが伸び、繋がっていつている音が

聞こえてきそうで見飽きる事はありません。

仕事の面で、昔のように遅くまで大学に残って一段落つくまで仕事を終わらせる事が出来ない、仕事を家に持ち帰っても全くすまないで翌朝を迎えてしまう事が多い、また母親としては、子供に接する時間が少なく、申し訳ない気持ちでいっぱいになるなどマイナス思考になってしまう事もありますが、それぞれ割り切って、出来る事に集中し、頑張ろうと思えますし、また、その元気をくれるのも子供の笑顔のようです。

最後になりますが、このように子供が小さくても仕事が続けられるのは、決して自分だけの力でできる事ではありません。齋藤功教授をはじめとして医局の先生方、多くの方にご配慮いただいたり、親切にさせていただいて本当にありがたいと感謝の日々です。また、私が仕事を続けられるようにサポートしてくれている主人にも感謝（けんかもしますが）しています。

結局とんだ親ばかぶりを書いてしまいました。そんなこんなで構内をばたばた走り回っていますので、見かけたら気軽に声をかけてください。これからも皆様よろしくお願い致します。

